

<p>団体名</p>	<p>一般社団法人OMUTA BRIDGE</p>	<p>活動タイトル</p>	<p>子どもが安全に過ごし安心して対話できるオンライン×オフラインの居場所事業</p>		
<p>望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）</p>			<p>■ 活動風景</p>		
<p>● 望ましい社会状況（ビジョン）</p>	<p>子どもたち一人ひとりが自分らしくいられる社会、それは自分の想いや考えに安心して向き合える、他者の考えや価値観を尊重することができる社会である。子どもたちは、社会から画一的な「あるべき姿」を求められ、本来自分の中にある可能性や想いに向き合う機会も経験も奪われている。私達は活動を通じ、子どもたちに様々な人やコトとの出会いを作り、自身の考えや価値観を育て、生き抜く力を身に付けていけるように子ども達に伴走していき、子ども一人ひとりの可能性が発揮される社会を目指す。</p>		 <p>PR e I S 社会体験として公共交通機関(電車)を利用</p>		
<p>● 団体の社会的役割(ミッション)</p>	<p>私たちは子どもたちの想いや一人ひとりの持っている「力」を一緒に探したい。 ①安全：運営メンバーが地域や学校とのつながりをコーディネートする。 ②安心：その人らしさを大切にして、その人の選択を見守り伴走する。 ③対話：「聴く・考える・振り返る」という要素で成り立つ対話を通して、多様性や価値観の違いを尊重し、子ども達の想いや気づきを促す。 ④出会い：人やコトとの出会いを通して、やりたい事、自分の気持ち、新しい考え方を習得し、生きる力を高める。</p>				
<p>● 団体の活動基盤</p>	<p>● 人的資源：マネジメントのできるコーディネーターや専門職サポーターの採用、育成及び協働体制の進展。また、地域人材（ボランティア）の発掘及び共通認識の基盤づくりとして地域向けの学びの場づくり（研修事業）を進める。 ● 持続可能な体制：法人化1年目のため、ガバナンス及び安定した財源構築に努める。具体的には組織運営体制の整備を進め、外部認定評価を受けることを通じ、一定信頼を得る。又、財源構築については賛助会員システムの構築（広報活動、会員管理等）や機関との協働体制（委託事業の実施）の構築を進める。</p>				
<p>■ 活動報告</p>			<p>■ 1年間の目標に対する達成状況(まとめ)</p>		
<p>本事業で申請している寺子屋活動は、週に2回、同じ時間に知った顔ぶれが滞在し、子ども達の価値観に寄り添った対話を中心に活動することで、子ども達にとって「安心して立ち寄れる居場所」創りをオンラインで取り組めた。本事業では大牟田市内の全ての中学生前後を対象としており、社会との繋がりに不安が強い、勉強したいとは思いがわからない、自分の想いなどを話をする場が持てない、夜間帯に自分を傷つける行動をとるなどの課題を持つ子どもが多く参加した。 「PR e I S」活動は月に一回開催しているが、子ども達同士のピア関係性や大学生・高校生サポーターによる斜めの関係を通して、生活スキルを高める（料理する、手続きをする、公共機関を理解し利用する など）、自己理解を深めセルフマネジメントする（認知行動療法、SST、ストレスマネジメント など）を、大きな基軸としグループワークを行う。対象は大牟田市内の中学生前後としており、参加している子ども達の中には、自尊感情が低い他者との交流や社会生活への大きな不安を抱える者も存在する。</p>			<p>寺子屋では、さまざまな子ども達が、専門職や大学生、他学年の子ども達との対等で安心な対話や交流を通して、不安を吐露する、好きなことや推しの話をする、何気ない日常のエピソードを共有する様子が見え、オンライン上にゆるやかな「居場所」が創られてきた。これまでの取り組みを通して見えてきた課題としては、この居場所が一定閉ざされた環境であることから、その場を利用するかを選択するために「体感する」一歩を踏み出すことに、大きなハードルがあることがわかった。 現状は専門職が関わる子ども達一人ひとりに異なる参加の「動機付け」を行い、オンライン寺子屋がどんな場であるかの「説明」を丁寧に行い、顔が見える安心感から初めての場へ「繋ぐ」というプロセスを経て参加に繋がっている。その窓口となる専門職や教職員を増やし居場所を必要としている子ども達へアクセスしたい。 PR e I Sでは、さまざまな経験や出会いの機会が奪われる環境下にある中学生前後を対象に生きる力を高めることを目的としたGWを行っています。グループ内のピア関係性の中で、想いや不安、好きなことや困っていることを吐露しやすい空間が作られている。社会的に孤立しやすい課題を抱えている家庭もあるが、アウトリーチを取り入れ保護者も含めて細やかにコミュニケーションを図ることで、活動参加が途切れることなく、また途切れても繋がりは絶やさず開く続けることができている。子ども達はそれぞれに気づきや本来持っている力を発揮し、それぞれに進路選択や日中の居場所に踏み出すなどのアクションに繋がっている。そのフォローとして、他機関との連携のためのアウトリーチも必要となった。活動の中で見られた子ども達の変化や力がその場だけのものにならないよう、子ども達への理解を得ながら必要に応じて関係機関等との連携を行うことで、学校や家庭など生活場面でも子ども達の力が生かされるように促している</p>		
<p>■ 事業を通じて得られたノウハウ</p>			<p>■ 望ましい社会状況を達成するための課題</p>		
<p>● オンライン上に居場所を創出するための要素 ・同じ曜日と同じ時間に開催し自由に入退室できる ・サポーターは福祉系大学生と専門職（SWやCSなど）が2人1組となって待機します。それぞれに得意なことや感性、年齢が異なるため多様性が担保され、また不特定多数ではない馴染みのメンバーにより固定化されることで参加者もそれぞれのキャラクターを把握しながら参加できるという安心感がもたらされる。 ・オフラインの場だけではなく、日中の生活（家庭や学校など）とリンクすることが出来ることで、寺子屋内で発信された「想い」を本人の希望を確認しながら実生活へ繋ぐことが出来る。この、オンラインとオフラインの行き来が重要であると考え。 ● 子ども達の対話を促す関わり ・尋問や目的的な会話ではなく、相手が話したい事、相手の言葉を「聴く」姿勢をサポーター間で共有し、向き合う際の大切なポイントとしている。 ・子どもによって興味関心が異なるため、それに応じて分担を図る。参加者が入室する前にその日のサポーターで打ち合わせをして対応の分担や振り返りを行う ・子どもの興味関心に沿った対話から導入し発展させていく ● 事業を進めるうえで必要とされるマンパワーの質や量 ・寺子屋に関しては現状の大学生×専門職という組み合わせで「場」を作ること、安心安全な環境が保たれると感じている。</p>			<p>寺子屋やPR e I Sの活動を通してエンパワーされていく子ども達の様子から、経済的、家庭環境、地域の環境など様々な環境要因により出会いや経験の機会が不足し、レジリエンスの低下につながるという課題が顕著に見えてきた。 制度政策ではサポートできない、社会的な関わりを必要としている子どもは多く、しかし社会にはそのような選択肢は少ない。 それらの対応策として社会への発信として近隣市町への啓発を行い高い関心や反応が得られている。地域や関係機関からのニーズは大きい、専門職や費用の確保の課題から、開催頻度が増やせない、活動内容の幅が限定されるなどの課題を感じているため、さらに多様な人の関わりを広げていく必要性を感じている。</p>		
<p>■ 活動成果のアピールポイント（自由記入）</p>			<p>この1年間の活動を通じて</p>	<p>社会と繋がりにくい子ども達との「繋がり」の創設</p>	<p>を達成しました。</p>
<p>■ 受益者の具体的な変化（自由記入）</p>			<p>・人や社会との繋がりを得た ・将来への展望を描き、調べ、アクションにつながった ・自分を傷つけるなどの行為や発言が減った</p>		